

作文コンクール “Leading to the Future 未来に向かって～教育・夢・感動～”

2019年 最優秀賞作品「私がすべきこと」

大阪府立槻の木高等学校 2年 後藤夕月さん

午前八時二十五分。だらだらと遅刻寸前で登校。中学生の頃の私は惰性で学校に通っていた。授業は面倒で、ノートに落書きをしながら五十分が過ぎるのをただボーっと待っていた。そのまま中学を卒業。今の高校に進学した。進学してすぐ、私は人生で初めての海外へ連れて行ってもらった。

飛行機に約五時間乗り、たどり着いたのはフィリピン。空港から見える景色はいかにも観光地という雰囲気だった。しかし、それはほんの一部にすぎなかった。空港を出てホテルに向かう車窓から見えた町は白かった。舗装されていない道路、車が通るたびに砂ぼこりを舞い上げる。信号機の数も少なく、クラクションの音が町中に響き渡る。それまでテレビ画面を通してしか見ることのなかった世界の貧困問題がとても身近にあった。

同世代くらいの男の子が働いていた。彼らは私たちが乗った小さな観光船の運航を手伝っていた。観光を終えた後、私たちは彼らに三十ペソのチップを渡した。日本円にしてたった数十円のチップ。彼らはとても嬉しそうだった。私の心は大きく揺れ動いた。

彼らのそんな様子を見て、私は自分が落書きしたノートの一ページと、ただボーっと過ごした五十分の授業のもったいなさを痛感した。学校に毎日通えること自体がとても恵まれているのだと気がついた。ただ惰性で学校に行っていたこと、遅刻ギリギリに嫌々登校していたことを深く反省した。そして高校ではこの気持ちを忘れずに、日々の生活をしっかり頑張っていこうと決意した。

帰国して、フィリピンのことや世界の貧困問題についてたくさん調べた。その中で識字率が五十％に満たない国がまだまだ多いことを知った。日本では教育の機会が保障されている。その大切さとありがたさを感じた。私の現在の夢は、「教師になること」になった。

今でも時折、勉強が面倒で嫌になることがある。でもそんな時、決まってフィリピンで出会った彼らのことを思い出す。彼らが生きていくために一生懸命に働いていたのと同じ様に、教育の機会を与えられた私たちは、そうでない彼らの分も、学ぶことを一生懸命に全うすべきだと思う。私の考え方を教えて夢を持たせてくれた彼らに感謝している。たとえ私が直接彼らに恩を返すことができなくても、私が教師になることでその恩を返すことができれば良いと思う。いつか貧困と教育の問題に携わり、国際貢献できればよいと思っている。